

大学教員の授業・研究・校務に対する価値と効力感が FD (Faculty Development) 研修への態度に及ぼす影響

向後千春*

早稲田大学人間科学学術院*

多喜翠**

CRI**

1. 目的

本研究は、各大学で行われる FD 研修において、教員個人のもつ授業・校務・研究といった職務に対する価値と効力感が FD 研修に対する態度に及ぼす影響について検討することを目的とした。

2. 方法

調査時期は、2016 年 10 月から 2017 年 11 月の期間であった。全国 7 か所の大学で開催された FD 研修内にて、参加した大学教員を対象に、質問紙調査を実施した。質問紙は、職務に対する価値と効力感を測るための尺度 6 項目（「授業はうまくできている」「授業にやりがいを感じている」、「研究」と「校務」についても以下同文）と、FD に対する態度を測るための尺度 5 項目（「FD の内容に興味がある」「FD は授業をする上で役に立つ」「FD で自分の授業に自信をもつことができる」「FD に参加して満足することが多い」「FD に参加することに積極的だ」）で構成した。回答方法は、いずれも「1. そう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. どちらともいえない」「4. ややそう思う」「5. そう思う」の 5 件法であった。

3. 結果

回答者 508 名のうち、欠損値を除いた 398 名（有効回答率 72%）について、分析を行った。

因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った結果、職務に対する価値と効力感を測るための尺度 6 項目において、2 因子 6 項目を抽出した（累積寄与率 35.16%）。第 1 因子を「校務と授業への肯定感」（ $\alpha=.80$ ），第 2 因子を「研究への肯定感」（ $\alpha=.79$ ）と命名した。また、FD に対する態度を測るための尺度 5 項目においても、同様の手続きを行った結果、1 因子 5 項目を抽出した（累積寄与率 63.78%）。第 1 因子を「FD への関与」（ $\alpha=.90$ ）と命名した（表 1）。

表 1 各尺度の因子分析結果（ $n=398$ ）

職務に対する価値と効力感を測るための尺度	mean	SD	負荷量
第1因子: 校務と授業への肯定感			
校務はうまくできている	3.45	0.82	0.61
校務にやりがいを感じている	3.28	1.00	0.58
授業はうまくできている	3.43	0.82	0.46
授業にやりがいを感じている	4.13	0.78	0.42
第2因子: 研究への肯定感			
研究はうまくできている	3.03	0.98	0.67
研究にやりがいを感じている	3.92	0.92	0.64
FDに対する態度を測るための尺度	mean	SD	負荷量
第1因子: FDへの関与			
FDは授業をする上で役に立つ	4.00	0.86	0.88
FDの内容に興味がある	3.86	0.89	0.87
FDに参加して満足することが多い	3.59	0.89	0.80
FDで自分の授業に自信をもつことができる	3.44	0.91	0.75
FDに参加することに積極的だ	3.61	0.91	0.68

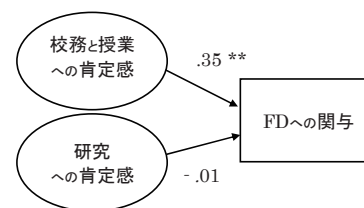


図 1 各因子得点による重回帰分析

次に、「校務と授業への肯定感」と「研究への肯定感」の尺度得点を独立変数、「FD への関与」の尺度得点を従属変数として、重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。その結果、「FD への関与」は「校務と授業への肯定感」との間に、有意な正の回帰係数を示した（図 1）。

4. 考察

本研究での調査の結果、教員の職務は二つに大別された。校務と授業は、やらなければならない職務として一体となり、一方で研究は、それらから独立した自発的な職務として捉えられていることが示唆された。そして、「FD への関与」の高さには「校務と授業への肯定感」が寄与していることから、職務を通じて所属する大学への忠誠心や貢献度が高い教員は、FD 研修にも積極的に参加していることが明らかとなった。